論文の内容の要旨

論文題目　孝の表象とその機能――二十四孝説話を基点として

宇野　瑞木

目的

本研究の中心課題である二十四孝とは、古代中国に生まれた家族間の実践倫理である「孝」を様々なタイプの孝行者（孝子）二十四人の事跡によって説いた〈孝子説話のダイジェスト版〉である。本論文は、この前近代の東アジア社会に孝という思想を広く浸透させる重要な役割を担った二十四孝を中心とする孝子説話の研究を通して、孝表象の機能の特徴を明らかにすることを目的としている。

尚、二十四孝は、中国は勿論、韓国、日本、沖縄、台湾、香港、シンガポールなどの広い地域に伝播した説話であるが、本論文においては、その中の中国、日本、及び韓国（韓国に関しては部分的に言及）の前近代までの現象に限定して分析することを行った。

研究の背景

従来、二十四孝（及び孝子説話）の研究は、主として説話文学、美術史、考古学の分野で個別的に進められてきた。しかし、それぞれの研究分野において部分的に蓄積がなされてきている一方で、それらを学際的に結び付け、全体像を把握することは、未だなされていない。それは、説話の流布した時代、地域、メディアが広範に亘っているために、研究分野が分散し、説話が一面でしか捉えられないことに起因していると考えられる。

方法

そこで本研究は、孝子説話をめぐる諸現象を、音声・図像・文字テクスト・身振りといった具体化されるもの、さらにそれを超えつつ結びつける力を「表象」として理解し直すことによって、既に各分野で蓄積されてきた成果を参照しつつも、そこにおいて見逃されてきた部分にも光を当て、説話表象の総体を浮かび上がらせようと試みている。

さらに、これまで孝の問題は即儒教の問題に置き換えられ、孝（＝儒教）の受容／非受容という二項対立的構図で捉えられがちであった。この構図を脱するために、本研究では「リアクション」という新たな視点を導入することで、反発的受容や選択的受容、或いは拒絶や誤解をも含めた説話享受の場の複雑な様相に肉迫しようと努めた。これによって、説話が機能したその時・場において、孝の物語（表象）が宗教的学問的枠組みの中で利用されつつも、一方ではそれらの枠組みを超えて孝固有の機能を働かせていた側面も見えてきた。例えば、孝の表象は、きわめて私的な場（記憶・物語）に働きかけることによって超越的次元に繋がるという特徴を持っており、それ故に、ある局面では、一種の平等性を確保し、また、あらゆる状況や枠組みをも突破する力となり得ていったのである。勿論、歴史的に見れば、死生観や社会構造の変化に伴い、孝の機能自体も変容し派生的要素を孕みながら、時には政治的領域において、また時には宗教的、個人的領域において作用していったのは言うまでもない。

構成

このように歴史的に帯びていった様々な説話の側面を、本論においては、１）墓という死者儀礼と関わる民俗学的側面、２）オーラルな語りによって変奏されていく説話としての側面、３）図像を伴った版本等の形で庶民へと流通していく出版メディアとしての側面の三部に緩やかに分けて論じる構成を採っている（無論、それぞれの側面は重なりあってくる場合がある）。この三部構成によって、各側面にある程度均等な光をあて、さらに結論において、三方向から照らしてみた時に浮かび上がる像を再度描き出すということを試みた。以下に、具体的な分析内容を簡単に示そう。

第一部では、孝子説話の図像の力に着目し、それが墓という死者儀礼の空間においていかなる機能を果たしていたか、さらに孝子伝図から二十四孝図への転換過程でどのような質的変化を遂げたのか、といった問題を扱った。第一章では、漢墓において、孝＝徳の働きが、墓域の樹木を連理させたり昇天を助ける雲気を生じたりする物理的な力として捉えられており、孝の表象そのものである墓という空間において、孝子図は民間信仰的な雲気や樹木といったモティーフと関わりながら、祠堂全体で有機的に機能していたことを明らかにした。

第二章では、漢墓の孝子図は世人に歴史からの学びを促す勧戒の機能を担う歴史人物図に属する性質のものであったが、六朝時代から唐代にかけて、三教及び雑多な宗教が混ざり合う中で、孝子図自体に、他の歴史人物図にはない、死者（祖先）の安寧と生者（子孫）

の成功という宗教的かつ世俗的な願いを成就させる吉祥的機能が直接託されるようになった過程を明らかにした。

さらに第三章では、そもそも私的エピソードである孝子説話を、全ての身分や時代に亘って並べ、二十四という数字で完結させることで、私的なものに普遍性を持たせたのが二十四孝であり、これによって孝子説話は強力な伝達媒体と成り得たことを論じた。とりわけ宋代以降の社会においては、二十四孝図は、内外の強制力をもった制度として存在し、その中である種イコンにも匹敵する強度をも帯びるような局面があった可能性について検討した。

第二部では、報恩としての孝を説く仏教徒の語りの場における孝子説話の機能を日中に跨って論じた。第四章では、郭巨説話に「母性」に関する描写が付加される現象に着目し、二十四孝の生成過程において、中国唐代の仏教寺院における説教の言説、とりわけ仏教側が報恩思想としての孝を説く『父母恩重経』が関わっていた可能性を指摘した。

第五章では、日本中世の唱導の大きな流れを作った安居院流唱導の文を中心的な分析対象とし、郭巨説話の「母性」に関する描写の付加という現象が日本でも展開したこと、そしてそれが単に中国仏教の語りの影響のみに起因するのではなく、当時の政治的状況や説話を語った唱導家自身の問題などが複雑に絡みながら生じたものであった可能性を示した。

さらに第六章では、日本中世の法会で語られた文を集成した『金玉要集』（室町中期写）の中でも亡母追善供養の詞章を中心に分析し、実際の法会において孝子説話が引用される際に、和歌的常套表現や物語・絵画など日本中世独自の想像力が入り込みながら語られていたことを指摘した。以上のように第二部では、母という両義的な場所（生命の根源であると同時に、穢れや罪が不可避な女性である）に報恩としての孝の根拠を求めながら、孝子説話の内面化されていく過程を、地域や時代の偏差も含みながら明らかにした。また、とりわけ孝子図像が墓に表象されることのなかった日本においては、墓という固定的な場ではなく、一回性の語りの場において、孝は死者、生者、仏神、万物を感通・共振させる力を発動していたことも指摘した。

第三部では、出版物としての二十四孝とその視覚的展開について中心的に論じた。第七章では、十七世紀初頭までの中国と朝鮮半島から渡来した版本の挿図、および日本の屏風・襖絵・扇面・絵巻・奈良絵本等を分析対象とし、日本の二十四孝図の生成過程を分析した。とりわけ渡来版本の中でも最も重要な位置を占める元末刊『全相二十四孝詩選』は、その重要性が認識されてはいたものの、挿絵に関しては前半の１４図しか明らかになっていなかった。そこで本章では、後半部分の６話分の挿絵を中国国家図書館で入手し、それを図像の比較分析に加えることを行った。これによって、江戸時代に流布する二十四孝図の原型が、初期狩野派の段階で出来上がったこと、またそれらは渡来本をもとにしながらも大いに改変が加わったものであったことなどが明らかになった。

続く第八章では、南北朝時代以降次々と渡来した絵入り版本によって、二十四孝が五山の禅僧たちを中心に周辺貴族や知識人へと広がっていく中で、江戸期に大きな展開をみせ

る二十四孝図の原型形成に五山僧達が関わっていたことを指摘した。具体的には、日本の孟宗図において、孟宗が文人姿から蓑笠姿に変容する点に着目し、蓑笠というモティーフに当時中国文人文化を愛好していた五山僧を中心とした知識人たちの隠逸的世界観が投影されていた点などを明らかにした。

第九章では、江戸期の井原西鶴の『本朝二十不孝』や蘭奢亭薫の黄表紙『二十四孝安売請合』のテクストと挿絵、さらに見立て絵など分析し、前時代に成立した和製二十四孝図ともいうべき独自のイメージを原型としながらも、さらに自由自在に断片化、脱文脈化されていく状況を考察した。これらパロディの行為は、一見中国における二十四孝図の固定化・制度化に相反した現象として看取されるものであるが、孝の世俗化が進んだ日本近世社会においては、孝の聖性はむしろこうした反／不孝の表象をもって迂回的に確保されるものであったことを指摘した。

以上の分析をもとに、結論では孝の表象の特徴と機能について、複数の機能が複合的に作用するプロセスとして描き出すことを試みた。日中韓の資料からみいだせる孝表象の共通的機能としては、第一に孝の吉祥性が挙げられる一方で、中国社会において強く現れる孝子を歴史的教訓として学びや戒めの対象とする態度（勧戒の機能）は、日本中世においては希薄であり、その代わりに、孝はより直接的に私的領域と超越的領域とを繋ぐものとして機能していった可能性を示唆した。

さらに孝子説話の重要な機能として、内発性を指摘した。すなわち、孝子説話は、私的な記憶に訴えかけ、自らの根源を発見させ、内なる物語を再創造することを促す装置でもあった。そして、この構造故に、孝子説話は、どれもが個別具体的な物語として表象されたのであり、そこに列なろうとする眼差しが注がれるものでもあったのである。そのメカニズムを最も効果的効率的に連鎖させていく仕組みを持ったものこそ、二十四孝だったといえるであろう。